

自然、人種、ジェンダー—ウィリアム・フォークナー『行け、モーセ』論（2）

大野 真*1

以下の論考は、『東京薬科大学研究紀要』第17号に掲載された「自然、人種、ジェンダー—ウィリアム・フォークナー『行け、モーセ』論（1）」に引き続いて、アメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーの作品『行け、モーセ *Go Down, Moses*』（1942年）を論じたものである。この長編小説は7つの中・短編小説から構成されるが、そのうちの5つ（「昔あった話」「火と暖炉」「黒衣の道化師」「昔の人たち」「熊」）までは前回の論考において扱った。本論は残りの2つ（「デルタの秋」、および、長編全体と同一タイトル名の短編「行け、モーセ」）を扱い、さらに、フォークナーとミステリー小説との関連を考慮したうえで、あらためてこの長編小説全体の特徴を考察したい。

<6. 「デルタの秋」>

人間の文明による自然の侵食は、次の「デルタの秋 *Delta Autumn*」においてもっとはっきりとした形で表れている。「熊」での出来事から約60年が経ち、アイクは今では80歳近い老人になっている。60年間に土地は変貌し（*change*）、農園や公道、機関車が進出して、野生の森は200マイルも遠くに後退している（324-26）。ヒットラーやルーズベルトといった時事的な政治家の名前への言及もあり（322）、時の流れを感じさせる。アイクたち一行は川を下ってデルタの地に着くのだが、それはあたかも、60年間の時間を逆行して過去に戻っていくような感覚を与える（325）。

「デルタの秋」においては、2層的構造の表層である現在時と、深層である過去との違い・変化が、60年間という時の流れを経て、いつそう際立つものになっている。人為と自然という観点から見ても、産業化や現実の政治社会といった人為の世界と、野生の自然の世界との対比が強調されている。その対比の中で、自らの農園相続権を放棄して一人暮らしをする老アイクは、野生の自然の世界の価値観を体現した人物とも考えられる。アイクは森の中で狩りをする際にも、乱獲ではなく、雌鹿（*doe*）や子鹿（*fawn*）は守るようにと主張する（323）。また、土地に関しても、「……土地は何者にも属していなかった。それは万人に属していた... *it belonged to no man. It belonged to all*」（337）という具合に考え、土地の独占的私有を否定する。

しかし、「デルタの秋」は老アイクをいわゆる「森の聖者」のような存在として絶対化せずに、彼の限界をも示唆している。物語の後半で、ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキャスリンの血を引き、トミーズ・タールの孫の娘である黒人女性が現れる。北部の人間で、現代的な意識を持つこの黒人女性はロス・エドモンズの元愛人であり、ロスとの間にできた子供を連れている。しかし、ロスは彼女に会おうとせずに、金が入った封筒をアイクに預け、彼女にこの金を渡して「ノー」と言うように頼む。アイクの方も彼女に対して、北部に戻って自分の人種である黒人の男と結婚するようにと忠告するが、その女性から、「ご老人、あなたは長い間生きて多くのことを忘れてし

*1 薬学部 第2英語研究室

まったので、愛についてそれまでに知っていたり感じたり見聞きしたことさえ、もう全然覚えてい
らっしゃらないのね」(346) という厳しい言葉を受ける。

ここにおいて示唆されているアイクの限界は、まず、男女間の愛情についてのアイクの無理解で
ある。これは、アイク自身において亡き妻との関係があまりうまくいかなかったこととも関係する。
次の限界は、黒人と白人との人種混淆を避けたがるアイクの気持ちである。アイクはこの物語の結
末近くで、デルタの土地を、様々な人種が皆一緒に暮らして子を生む人種混淆的な場所として捉え
直してもいるが(347)、ロスと愛人である黒人女性との子供という現実的な人種混淆は受け入れる
ことができない。また、アイク自身の農園相続権の放棄も、その黒人女性からは、アイクがロスの
祖父に対して土地を与えてしまったために、結局ロスは一人前の男になれないのだ、「あなたが彼を
甘やかしてだめにしたのだ *You spoiled him*」(343) として批判されてしまう。つまり、まとめて
みると、アイクは過去の価値観を引き継いでいる人物であるために、北部の現代的な女性によって
表されているような、現在の流動する現実社会の新しい変化に対応できない。この作品においては、
2 層的構造の表層である現在と深層である過去とのずれが、老アイクの姿によって示されているよ
うだ。

なお、アイクの農園相続権の放棄という行為の評価について、批評家の意見は分かれている。
カール・F・ゼンダーは、アイザック・マクキャスリンの姿において、フォークナーは「束縛から
の自由と言う彼の夢 *his dream of freedom from constraint*」を表現したのだと肯定的に評価する
(80)。ゼンダーの考えに従うと、アイクの相続権放棄は、土地の所有にまつわる束縛からの解放
と位置付けられるだろう。しかし、その一方で、ジョーゼフ・R・アーゴーは、「デルタの秋」での
老アイクの姿を取り上げて、「実際、アイクは人生の終わりにおいて、彼の相続権放棄が完全に利己
的で歴史的には反動的なものだったと悟ったのだ」(217) と述べて、アイクの相続権放棄を否定的
に評価する。アーゴーは、「『行け、モーセ』は生者がありのままの現実世界に対して責任を取るこ
とを要求している」(219) という見解から、アイクの行為を現実世界からの逃避として否定的にと
らえたのであろう。ダイアン・ロバーツも、アイクが結局のところ人種問題に対して責任を取れな
かったことを指摘して、アイクが「デルタの秋」の黒人女性を「黒ん坊 *nigger*」とレッテル付け
をしている点にアイクの人種に対する見解の限界があるとしている(87)。

アレクサンドル・ワシチャンコも老アイクが最後に自らの敗北を認めることになったという評価
であるが、老アイクという主人公が脇役の黒人女性によって批判されることに、むしろフォークナ
ーのリアリズムの長所を見ている点で興味深い。「これは疑いなくフォークナーのリアリズムの最大
の長所の一つである。つまり、主人公を脇役を通じて批判することを許容する彼の能力である。そ
れによって、主人公の世界観の限界を示し、また、作家の高い立場での客観性も示すのである」(217)。
筆者もこの見解に賛同したい。「熊」におけるアイクの相続権放棄は、白人による土地の収奪や白人
の世界観の批判となるが、そうしたアイクの行為を絶対化せず、「デルタの秋」においてはアイク
の世界観も批判してその限界を示す。

筆者はこれをフォークナーのリアリズムの「弁証法的発展」と呼びたい。批判的原理の導入によ
り、次々と世界観が相対化され、深化していくのである。

<7. 短編「行け、モーセ」と長編全体のまとめ>

連作長編の最後に位置するのは、長編全体と同じタイトルの短編「行け、モーセ Go Down, Moses」である。この短編では、ルーカス・ビーチャムとモリーの孫であるサミュエル・ワーシャム[ブッチ]・ビーチャムという26歳の黒人青年が登場する。彼は故郷を去った後にシカゴで警官殺しの罪で処刑される。ブッチの育ての親であった祖母のモリーは、ブッチの遺体を故郷のジェファソンに運んで埋葬してもらいたいことを願い、郡検事ギャヴィン・スティーヴンズに協力を依頼する。モリーがブッチを旧約聖書中のベンジャミンに喩えている点が注目される(353、362)。白人側のエドモンズ家の影とも言える、黒人側のビーチャム家の末裔であるブッチの死刑にまつわる出来事を述べたこの短編によって、壮大な連作長編は幕を閉じる。

*

ここで、まとめとして、連作長編全体を振り返ってみたい。第1話の「昔あった話」は喜劇的な調子で始まるが、連作が進むにつれて、喜劇の深層にある人種問題の悲劇が徐々に明らかになっていく。表層と深層の2層的構造は、時間的観点から見ると、現在と過去の2層的構造である。さらに、「昔の人たち」や「熊」においては、人為と自然の2層的構造とも言え換えられ、黒人ばかりではなくネイティブ・アメリカンに対しての土地の収奪の問題も扱われる。人為と自然の主題が前面に出ているのが、『行け、モーセ』の大きな特徴であり、エコロジー的な観点からも興味深い。

このように、連作を通じてアメリカの歴史の深層にある人種などの問題が探求されていく。白人にとっては、自らの意識の深層にあるこうした問題とどのように向き合うかが大きな課題であり、「熊」の第4節において描かれたアイクの相続権放棄の決断は、彼なりの誠実な対処の仕方であると言えるだろう。しかし、フォークナーはアイクの行為を絶対化せず、次の「デルタの秋」においては、北部の黒人女性の声を通じてアイクの限界を指摘し、アイクの世界観をも相対化する。そのようにして、物事の見方、認知の枠組みが弁証法的に発展し、深化していく。

『行け、モーセ』では、連作長編という独特の形式をとることにより、2層的構造が各々の中・短編において次々に形を変えて展開される。この点で、フォークナー作品の中でもとりわけ注目すべきものである。

<8. 『行け、モーセ』とミステリー>

さて、以上で『行け、モーセ』各編の持つ2層的構造について検討してみた。

ところで、表層と深層という2層的構造は、ミステリー小説との関わりが深いものである。つまり、推理小説においては、表層の事件(謎)の下に隠れた深層(真相)が存在し、探偵は表層に残されたわずかな手がかりを糸口にして、謎の真相に迫っていくのだ。『行け、モーセ』の2層的構造もミステリー小説的な要素を強く持ち、最初の喜劇調の短編「昔あった話」から始まって、その後の中・短編へと物語が進行していくにつれて、深層に隠れていた人種問題や、アイクの先祖の犯した罪、自然に対する人為的収奪などの悲劇的テーマが徐々に展開されていくのである。

フォークナーは『行け、モーセ』以外にも、『アブサロム、アブサロム!』などで、ミステリー的な2層的構造を用いて南部の歴史にまつわる人種問題の悲劇を探究している。また、フォークナーは『墓地への侵入者』や『駒さばき』などの狭義の推理小説的作品、あるいは『サンクチュアリ』

のようなハードボイルド探偵小説的作品を書いており、フォークナーとミステリーとの関わりは深いのである。

フォークナー作品とミステリーとの関係については、筆者もこれまでに「ミステリー小説としての『アブサロム、アブサロム!』—現在と過去との二層構造」(『東京薬科大学研究紀要』16(2013): 9-15)などの論文で論じてきたし、それらの論考を1冊の論文集にまとめたものもある¹⁾。

さて、フォークナーとミステリーというテーマについては、2009年7月に開催された第36回フォークナー・ヨクナパトーフア会議においても全体の主題となり、そこでの発表原稿に基づいて、2014年に論文集 *Faulkner and Mystery: Faulkner and Yoknapatawpha, 2009* が出版された。この論文集においても、『行け、モーセ』あるいはその重要な登場人物であるルーカス・ビーチャムに対する言及があり、ミステリーとの関わりという視点から考察がなされている。

以下においては、*Faulkner and Mystery*における諸論を筆者なりに再検討してみたいと思う。

まず、*Faulkner and Mystery*の論文集の中で、『行け、モーセ』との関わりという点で注目すべきなのは、フィリップ・ワインスタイン (Philip Weinstein) による論考 (“And you are—?: Faulkner’s Mysteries of Race and Identity”) である。

ワインスタインは、ミステリーの本質を「アイデンティティーの解体 the undoing of identity」としてとらえる—「言い換えると、ミステリーはその本質として、アイデンティティーの解体を示唆する」(4)。このように、ミステリーの本質をアイデンティティーの解体と結びつける主張は妥当であると思われる。多くの推理小説において用いられてきた「一人二役」のトリックは、まさにアイデンティティーの分裂をトリックとして生かしたものだからだ。また、ワインスタインは、古代におけるミステリーの原型としてソフォクレス作の悲劇『オイディプス王』を考えるが、オイディプス王に秘められた謎(運命に操られて、意識的に意図せずに父親を殺して母親と結婚してしまったこと)とその暴露は、王自身の人生を劇的に変えてしまい、王は自らの両目をえぐり、身分を捨てて放浪の末に死に至るのである—「……オイディプス王は自己を解体し、両目をえぐりだし、アイデンティティーを捨て去るのだ」(5)。

ワインスタインは、こうした「アイデンティティーの解体」としてのミステリーという角度からフォークナーの諸作品を検討し、フォークナーにおけるミステリーの重要な要素として人種的アイデンティティーに注目したうえで、以下のように総括する。

彼の小説は人種を無視することから始まり、それから—新たなエネルギーを蓄えたうえで—ミステリーとしての人種へと向かっていき(『八月の光』)、さらにこうしたミステリーの核心へと突き進み(『アブサロム、アブサロム!』)、それからミステリーとしての人種からは目を転じてしまい(『行け、モーセ』)、純粋な探偵事(detection)に終わってしまったのである(『墓地への侵入者』)。(6)

ワインスタインがミステリーとしての人種問題において重んじるのは、人種的アイデンティティーの不確実性ということである。例えば、『八月の光』において、主人公の一人ジョー・クリスマスが白人であるかあるいは黒人の血が混じっているかは不確定である—「彼の人的アイデンティティー

はミステリー（謎）のままである」(8)。そして、『八月の光』はジョー・クリスマスの人種的アイデンティティーという謎を最終的に「解決不可能 unsolvable」なものとして扱うのだ(10)。

『アブサロム、アブサロム!』においても、チャールズ・ボンの黒人の血の可能性を不確定にしておくことが、ボンの謎めいた性格を強める—「……最も謎めいた登場人物 [ボン] の人種的アイデンティティーを読者に知らせないでおくことによって、『アブサロム、アブサロム!』はボンを小説の空想の中心に据えるのである」(11)。ボンの人種的アイデンティティーの不確定性は、彼の謎めいた性格を強め、恋人や語り手たちがそれぞれ自分の好みの欲望をボンに「投影 project」(11)させることになる。ミステリーとしてのアイデンティティーを物語の中心とした点において、『アブサロム、アブサロム!』は『オイディプス王』との類縁性が深いのだ。

しかし、『行け、モーセ』や『墓地への侵入者』は、ミステリーとしてのアイデンティティー、あるいは人種的アイデンティティーの不確定性という点において、『八月の光』や『アブサロム、アブサロム!』よりも後退しているとワインスタインは解釈する。

まず、『行け、モーセ』において、「焦点はミステリーとしてのトミーズ・タールのアイデンティティーにあるのではない」(15)とワインスタインは指摘する。トミーズ・タールは白人の血が混じった黒人としての自らのアイデンティティーに悩むよりも、むしろ、マッキヤスリン家の黒人奴隷としての自分の立場を受け入れるとともに利用しているとワインスタインは考える(15)。また、トミーズ・タールの息子であるルーカス・ビーチャムについても、「ルーカスにまつわる人種的に錯綜した歴史は白人の不正として表されるのであり、アイデンティティーのミステリーとしてではない」(15)とワインスタインは言う。

さらに、推理小説的構成をもつ『墓地への侵入者』においても、ミステリーの焦点はアイデンティティーにあるのではない、とワインスタインは主張する。「『墓地への侵入者』のミステリーは別のもに焦点がある。つまり、棺の中の死体に焦点があるのである」(16)。『墓地への侵入者』の基本的性格は、棺の中の死体をめぐる「探偵事 detection」なのである。「最終的に、フォークナーは、人種的相違を乗り越えるよりもむしろ、白人と黒人を別々だが平等の存在として認めるように努めていくようになった。このため、彼はもはや人種に焦点を当てたミステリーを全然必要としなくなった。棺の中に入っているのは誰の死体かということを探偵事だけで十分なのであった」(17)。

さて、以上で紹介したワインスタインの論は、フォークナーにおけるミステリーを人種的アイデンティティーの不確定性という側面から論じた興味深いものである。確かに『八月の光』のジョー・クリスマスや『アブサロム、アブサロム!』のボンにおいては、彼らに黒人の血が混じっているか否かはテキストの中で明確にされておらず、不確定性のミステリーという点では、両作品は優れた設定を持つといえるだろう。そうした観点からみると、『行け、モーセ』のトミーズ・タールやルーカスの場合、彼らが白人と黒人の混血であることはテキスト中で明らかであり、そのこと自体は不確定ではない。焦点は黒人奴隷との近親相姦を犯した白人の罪にあるのであり、人種的アイデンティティー自体の不確定性ではない。人種的アイデンティティーの不確定なミステリーという点からは、ワインスタインが主張するように、『行け、モーセ』は『八月の光』や『アブサロム、アブサロム!』に比べると一歩後退しているといえるかもしれない。

しかし、ここで2層的構造の観点を考慮してみると、また別の評価ができるように思う。

『行け、モーセ』の2層的構造においては、白人の自我の深層には黒人の存在が深く関わっている。つまり、白人は白人社会だけで完結するものではなく、一人の白人の自我が形成されるにあたっては、黒人あるいはネイティヴ・アメリカンといった異人種との交流が不可欠なのであり、そうした異人種との関わりの歴史や記憶が白人の自我の深層に存在するのだ。白人たちの中には、アイクのように、ネイティヴ・アメリカンの血が入ったサム・ファーザーズの教えを受けて自然の中で成長し、長じては先祖の白人が黒人奴隷に対して犯した罪を深く受け止めて財産放棄をする者もいる。あるいは、エドモンズ家の白人たちのように、幼い時は黒人乳母の世話を受けて、同年齢の黒人の子供と双子の兄弟のようにして育ちながら、やがて成長するにつれて、黒人との精神的絆をある程度断ち切ることによって成人の白人としての自我を形成する者たちもいる。

いずれにせよ、『行け、モーセ』の2層的構造は、白人の自我の深層に異人種の存在を置くことにより、白人が白人社会のみの論理で秩序を形成することに異議を唱え、そのような秩序に対して揺さぶりをかけ、既成のシステムを不安定にするのである。つまり、『行け、モーセ』の2層的構造においては、白人の自我の形成過程に異人種の存在が深く関わっていることが提示されているのであり、個人というよりも個人間の社会的関係が重視されている。その点において、『行け、モーセ』は興味深い前進を示していると言えるだろう。

ここで、白人社会の秩序に揺さぶりをかけるような異人種の存在として興味深いのが、『行け、モーセ』や『墓地への侵入者』に登場する黒人ルーカスである。

*Faulkner and Mystery*中に収められた、エステル・サンチェス・パルド (Esther Sánchez-Pardo) の論考 ("Critical Intruders: Unraveling Race and Mystery in *Intruder in the Dust*") は、『墓地への侵入者』を扱い、とくに黒人ルーカスが白人社会の既成秩序を攪乱させる効果に焦点を当てている。

『墓地への侵入者』では、白人殺しの嫌疑をかけられた黒人ルーカスの無罪を証明しようとする少年たちの活躍が描かれているが、この作品において、「フォークナーは、黒人男性の犯罪性を前提としているような南部白人の法的制度を検討し、さらには拒絶するように我々に求めている」とサンチェス・パルドは言う (123)。

従来の推理小説では、事件が解決された後に秩序が回復されることに重点が置かれるが、『墓地への侵入者』では、むしろ秩序に対する疑問や攪乱が重要になってくる。それによって、既成の秩序の問題点 (例えば、黒人を犯罪者と結び付けがちな社会体制) が浮き彫りにされてくるのだ。黒人ルーカスは、南部白人社会の秩序を揺るがして攪乱する存在であり、サンチェス・パルドはそうしたルーカスを既成秩序に対する「侵入者 intruder」と位置付けている (132)。

ここで、サンチェス・パルドの主張を2層的構造の観点から再解釈してみると、『墓地への侵入者』の表層には、黒人ルーカスを犯罪者と断定してしまいがちな南部白人社会の制度という既成秩序があり、その深層には、事件の真相 (実はルーカスではなくて白人が真犯人であること) が存在する。棺の中の死体が暴かれて真相が明らかになるにつれて、表層の秩序は揺り動かされて再検討を迫られる。前述のように、ワインスタインは『墓地への侵入者』を棺の中の死体をめぐる探偵事と見なして高い評価を与えていなかったが、白人社会と黒人ルーカスとの関係やその2層構造性を

考慮すると、やはり既成秩序に対する揺さぶりや不確定化が見られるだろう。

なお、既成秩序を揺さぶる存在としては、黒人とともに女性登場人物たちが重要である。とくに、「ファム・ファタール *femme fatale*」、いわゆる危険な魅力を持つ妖婦のような女性が重要である。こうしたファム・ファタールはフィルム・ノワールのミステリー映画に数多く登場するが、彼女たちは男と同様に喫煙をし、犯罪に絡んだ謎めいた魅力を持っていて、男性たちを幻惑する。

Faulkner and Mystery においては、スーザン・V・ドナルドソン (Susan V. Donaldson) が “Reimagining the Femme Fatale: Requiem for a Nun and the Lessons of Film Noir” で、ナンシー・マニゴーやテンプル・ドレイクといったフォークナー作品の女性たちをファム・ファタールという観点から論じており、その中で、「男性的権威の秩序を揺るがすようなファム・ファタールの衝撃力」(144)を指摘している。ファム・ファタールは男性的権威と対になった南部淑女のモデルから逸脱する女性なので、既成秩序を不安定化させる存在—しかし、その一方で、謎めいたミステリーの魅力を持つ存在—なのである。(なお、ミステリー小説におけるファム・ファタールを論じた興味深い論考としては、他に、諏訪部浩一『ノワール文学講義』中の「ファム・ファタール事件簿—ハードボイルド探偵小説の詩学」がある²⁾。

< 9. 結び >

フォークナー作品が持つ2層的構造は、表層の出来事の下に隠れた深層があることを暗示し、作品に謎めいたミステリーの性格を与える。とくに、アメリカの南部社会を描いた作品であるために、南部白人社会の父権的な秩序の深層には異人種あるいは女性が存在することになり、そうした深層の存在によって、表層の秩序が攪乱され不確定化し、再検討を迫られる。異人種や女性は安易な解釈を拒むべき、謎めいたミステリアスな存在ともいえる。このように、2層的構造を考慮に入れてみると、これまでのフォークナー研究で積み重ねられてきた人種やジェンダーの問題が、ミステリーという角度から新たに検討されることであろう。

また、フォークナー作品においては、作品中の「時間」の扱い方の技法がしばしば話題になってきた。これも2層的構造の観点から考えてみると、「現在」の出来事という表層の下には必ず「過去」の出来事という深層が存在し、しかも、「過去」は登場人物たちにとって解決済みのものではなくてトラウマとなっており、そのために、「過去」の深層がしばしば「現在」の表層に深い影響を与え、直線的なクロノロジーをかき乱す。また、「現在」の表層から「過去」の深層を推理・探究していくことが重要になり、歴史的ミステリーの性格をフォークナー作品に与えるのである。

『行け、モーセ』においても、こうした2層的構造によるミステリーという性格が十分に表れている。とくに、白人荘園領主の血を引いた黒人ルーカスの存在は、白人社会の自足した秩序を問い質さずにはいられなくさせるのだ。

なお、『行け、モーセ』の特徴としては、とくに、黒人に加えてネイティヴ・アメリカンと自然の主題も大きく扱われていることが挙げられる。2層的構造という観点で言うと、人為の世界の深層にある自然の世界に焦点が当てられ、エコロジ的な視点が見られる。また、アイクの成長におけるサム・ファーザーズとの関わりを描くことによって、白人アイクの成長過程において異人種の存在が深層にあることが示される。

また、『行け、モーセ』は中・短編をつなげることによって一つの長編全体を構成しているのも特徴である。このことは、各編を通して異なった角度で2層的構造が提示され、深層にある過去の事件の謎（白人荘園領主の犯した罪）が徐々に開示されるとともに、南部奴隷制度や自然の浸食といった主題が様々な側面から再検討されることを意味する。こうしたいわば重層的な2層的構造を持つことによって、各編を通じて読者の認知の枠組みが徐々に深まり、さらには以前の枠組みが否定されて、いっそう高次元の枠組みが示されるような弁証法的な展開も見られる。

『行け、モーセ』のこうした重層的な2層的構造は、ミステリー（謎）が多角的に検討されて深化されていくことを可能にしたのである。

【注】

1. 大野真『ウィリアム・フォークナーにおけるミステリーと二層的構造』（2013年）において、ミステリー小説とフォークナー作品との関連を論じた拙論の主要なものをまとめてある。ただし、『行け、モーセ』については、この論文集では扱っていない。
2. 諏訪部は『マルタの鷹』の結末を分析し、探偵のサム・スペードがブリジッド（ファム・ファタールの魔性の女性）を逮捕させ、かつその後で、スペードが秘書エフィ（彼にとって「母」的な位置づけの女性）に拒絶されてショックを受けることに注目して、『マルタの鷹』の苦い結末はこうした[父権的な]秩序の機能不全をあらわにし、読者の期待の地平を揺り動かす（99）と指摘する。確かに、諏訪部が言うように、スペードが秘書エフィーという「母」的な女性に受け入れられてしまえば、ファム・ファタールによって揺さぶられた父権的な秩序は再び回復して大団円を迎えることになったかもしれない。こうした秩序の揺さぶりや秩序の回復不能性がハードボイルド探偵小説らしい特徴である。

【引用文献】

- Faulkner, William. *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage International, 1990.
- Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood*. Athens: U of Georgia P, 1994.
- Trefzer, Annette and Ann J. Abadie ed. *Faulkner and Mystery: Faulkner and Yoknapatawpha 2009*. Jackson: UP of Mississippi, 2014.
- Urigo, Joseph R. *Faulkner's Apocrypha: A Fable, Snopes, and the Spirit of Human Rebellion*. Jackson: UP of Mississippi, 1989.
- Vashchenko, Alexandre. "Woman and the Making of the New World: Faulkner's Short Stories." *Faulkner and Women: Faulkner and Yoknapatawpha, 1985*. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1986. 205-19.
- Zender, Karl F. *The Crossing of the Ways: William Faulkner, the South, and the Modern World*. New Brunswick: Rutgers UP, 1989.
- 諏訪部浩一『ノワール文学講義』研究社、2014年。